

The Last September における Danielstown 炎上の意味することについて

杉 本 久 美 子*

The Significance of The Burning of Danielstown in *The Last September*

Kumiko SUGIMOTO*

Key words : Elizabeth Bowen	エリザベス・ボウエン
Big House	ビッグ・ハウス
Bowen's Court	ボウエンズ・コート
Anglo Irish Ascendancy	アングロ・アイリッシュ・アセンダンシー

はじめに

アイルランド人作家エリザベス・ドロシア・コウル・ボウエン (Elizabeth Dorothea Cole Bowen, 1899-1973, 以降 Bowen と表記する) が 1929 年に出版した小説 *The Last September* は、彼女にとって 2 作目の長編小説である。この作品は、ビッグ・ハウス (Big House) と呼ばれるアイルランド地主の邸宅とそこに集う人々の人間模様、特に主人公 Lois Farquar の成長課程を描いている。この作品の舞台となっているビッグ・ハウスは Danielstown という邸宅である。この邸宅の元になったのは、Bowen 自身が相続したボウエンズ・コート (Bowen's Court) と呼ばれた屋敷である。ボウエンズ・コートが Bowen にとっての精神的拠り所であり続けたのと同様に、この作品における Danielstown もまた各登場人物にとっての「家」に対する意識を浮き彫りにする存在でもある。Maud Ellmann は、“In her [Bowen] writing, architecture takes the place of psychology: character is shaped by rooms and corridors, doors and windows, arches and columns, rather than by individual experience.” (Ellmann, 42) と指摘し、彼女の作品において建物は登場人物たちの人間性を形作っているとした。*The Last*

September においても、Danielstown を舞台に話は展開し、作品自体も邸宅の炎上で幕を閉じている。ただし、Danielstown は単に登場人物たちの性格だけを映し出しているのではなく、当時のアイルランドが抱えていた諸問題をも象徴している。本論考ではビッグ・ハウス文化の象徴として描かれている Danielstown の描かれ方とヒロイン Lois との関連性を読み解くことで、*The Last September* におけるシンボルとしての Danielstown と邸宅の炎上が意味することについて考察したいと思う。

ビッグ・ハウスについて

作品の舞台かつ象徴というべき Danielstown は、Naylor 夫妻、アイルランドでアングロ・アイリッシュ・アセンダンシー (Anglo Irish Ascendancy) と呼ばれた支配階級に属する人々の屋敷である。アングロ・アイリッシュ・アセンダンシーは元来イングランドとアイルランド間で生じた王権争いとそれに伴う宗教・領地問題政策に端を発したもので、特に 16 世紀末から積極的にアイルランドへ送り込まれた領地保有のための支配者たちである。カトリックとプロテスタントがせめぎあう情勢のなかで、統治という使命を担ったアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーは、イングランド人やプロテスタントとしての誇りを維持する一

* 東北女子大学

方、生粋のアイランド人からは支配者とみなされ、アイランドの中でも孤立した立場となっていた。Bowen 自身も、このアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーの後裔であり、また主人公の Lois と同様、13歳の時に母親を亡くし親戚の家を転々とした。この経験は、Bowen にアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーたちの文化だけでなく、それぞれの家をもつ特性についても認識させた。ビッグ・ハウスを訪れた際に感じる邸宅の様子について、彼女は“the spell”という表現を用いて、その特異性を記している。

When I visit other big houses I am struck by some quality that they all have—not so much isolation as mystery. Each house seems to live under its own spell, and that is the spell that falls on the visitor from the moment he passes in at the gates. (*Collected Impressions*, 1950, 195. 下線筆者)

ボウエンが相続したボウエンズ・コートは1776年に完成したものである。18世紀後半頃からビッグ・ハウスは「邸宅」や「屋敷」と呼ぶにふさわしい規模になっていた。邸宅までの長いアプローチや広大な敷地を取り囲む森といった、その作りにより、ビッグ・ハウスは近隣から物理的に孤立する形となる一方で、その精神性に関しても特有な性質“the spell”を帯びる形となった。ビッグ・ハウスの性質について、Bowen はさらに以下のように述べている。

[...] life in the big house, in its circle of trees, is saturated with character: this is, I suppose, the element of the spell. The indefinite ghosts of the past, of the dead who lived here and pursued this same routine of life in these walls add something, a sort of order, a reason for living, to every minute and hour. This is the order, the form of life, the tradition to which big house people still sacrifice much.

(Ibid., 198-199. 下線筆者)

Bowen はビッグ・ハウスが持つ特性について“the spell”という表現を当てている。「過去」や「変わらない生活様式」「秩序」「伝統」という表現から分かるように、ビッグ・ハウスの精神には「不変」が中核をなしていることが窺える。さらにビッグ・ハウスやそこに生きるアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーについて、Bowen は「孤立」という表現を用いている。

Each of these family homes, with its stables and farm and gardens deep in trees at the end of long avenues, is an island—and, like an island, a world. Sometimes for days together a family may not happen to leave its own demesne....Each member of each of these isolated households is bound up not only in the sensation and business of living but in the exact sensation of living here. The upkeep of the place takes its tax not only of physical energy but of psychic energies people hardly know that they give. Each of these houses, with its intense, centripetal life, is isolated by something very much more lasting than the physical fact of space: the isolation is innate; it is an affair of origin. It is possible that Angle-Irish people, like only children, do not know how much they miss. Their existences, like those of only children, are singular, independent and secretive. (Bowen's Court, 1942, 19-20. 下線筆者)

Bowen はビッグ・ハウスを「まるで一つの島のような、一つの世界を形成している」と描写し、その孤立性を指摘している。この孤立性は長い通りの奥で木々に隠れるように立つ邸宅の様子や近隣からの物理的距離によって生み出されるものである。またそこに生きるアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーたちの由来、生粋のイングランド

人でもなければ、純粋なアイルランド人でもないという彼らの血筋から精神的な孤立をも誘発する。このように見ていくとビッグ・ハウスが持つ“the spell”には「不変の伝統や秩序」「孤立」および「独立」という特徴が込められていることが分かる。そしてこの特性は *The Last September* の Danielstown にも与えられている。

To the south, below them, the demesne trees of Danielstown made a dark formal square like a rug on the green country. In their heart like a dropped pin the grey glazed roof reflecting the sky lightly glinted. Looking down, it seemed to Lois they [the Naylor] lives in a forest; space of lawns blotted out in the pressure and dusk of trees. She wondered they were not smothered; then wondered still more that they were not afraid. Far from here, too, their isolation became apparent. The house seemed to be pressing down low in apprehension, hiding its face, as though it had her vision of where it was. (*The Last September*, 92. 下線筆者)

「緑の田園地帯の敷物」や「Danielstown での生活はまるで森に住んでいるかのようだ」とあるように、Danielstown の立地的条件は従来のビッグ・ハウスと同様あきらかに近隣から物理的に孤立している。また住人たちが息苦しさや怖さを感じないことを Lois は不思議に思っていることからわかるように、この邸宅が外部に与える雰囲気は閉塞的なものがある。さらにこの邸宅の描写には、“dark” や “grey” といった寒色表現が使用され、“green country” とのコントラストを強調している。さらに “dusk” や “apprehension” といった「憂愁」を感じさせる言葉を併用することで、Danielstown の将来を暗示させている。この「憂愁」のイメージはさらには邸宅がもつ「曖昧さ」へと繋がっている。

Seen from above, the house in its pit of trees seemed a very reservoir of obscurity; from the doors one must come out stained with it. And the kitchen smoke, lying over the vague trees doubtfully, seemed the very fumes of living.

But as they drove down the home-sense quickened; the pony, knowing these hedges, rocketed hopefully in the shafts. The house became a magnet to their dependence. (ibid., 93. 下線筆者)

この“obscurity”も、“smoke”や“vague”、そして“fumes”という表現と併用されることで強調され、読者に全体に霽がかった、漠然とした印象を与えている。その一方で“a magnet to their dependence”という表現から、Danielstown は外部に対して閉鎖的でありながら、内部の人間たちにとっては独立心の拠り所となっていることが分かる。Danielstown にはビッグ・ハウス特有の孤立性、物理的距離間そして独立心が付与されている。では、この邸宅に住むヒロイン Lois にとって Danielstown はどのような役割を担っているのだろうか。

Danielstown における Lois と Laurence

Lois は Danielstown の当主 Sir Richard Naylor の姪にあたる。Lois の母 Laura の死後、Lois は Naylor 夫妻の庇護のもと、この邸宅に住んでおり、彼女には Gerald Lesworth という英国軍人の恋人がいる。Lois は Gerald との会話の中で、Danielstown における自分について“cocoon”という表現を用いて形容している。

“[...] Do you know that while that was going on, eight miles off, I was cutting a dress out, a voile that I didn't even need, and playing the gramophone?...How is it that in this country that ought to be full of such violent realness there seems nothing for me but clothes and

what people say? I might as well be in some kind of cocoon." (ibid., 66. 下線筆者)

「繭の中にいるかのよう」というこの“cocoon”という表現は、二通りに解釈しうる。一つは彼女にとって Danielstown は外界から彼女自身を遮断するもの、あるいは限られた狭い世界に拘束するもの。二つ目の解釈としては「繭」という表現から連想される保護と成長課程（変化の最中）というものである。実の両親ではない Naylor 夫妻の保護下にある Lois にとって Danielstown は安住の地ではなく、彼女はビッグ・ハウスの特性と同様な「孤立（孤独）」や物理的距離間、独立に関する問題を抱えている。

“[...] But why do you stay here?”

“I can't think,” said Lois, startled.

“You like to be the pleasant young person?”

“I like to be in a pattern.” She traced a pink frond with her finger. “I like to be related; to have to be what I am. Just to be is so intransitive, so lonely.”

“Then you will like to be a wife and mother.” Marda got off the writing-table and began to change her stockings. “Jacob's ladder,” she explained. “It's a good thing we can always be women.”

“I hate women. But I can't think how to begin to be anything else.” (ibid., 142. 下線筆者)

Lois になぜここにとどまっているのか訊ねる Marda Norton は、Lois の属する世界とは間逆の、伝統や慣習に縛られない自由な現代的女性である。一方、Lois は「型にはまっていたい」「結びついていたい」といい、ただ単に Danielstown にいることは“intransitive”で“lonely”であるという。彼女にとって Danielstown は必ずしも居心地の良い場所ではなく、精神的孤独を抱えていることがわかる。しかし、Naylor 夫人に象徴されるような典型的な女性（妻や母親）になりたいわ

けではなく、かといって他のものになるために何を始めたらよいかわからない、という自己のあり方や将来に対し漠然とした不安を抱いた状態にある。「型にはまる」というのは無論アングロ・アイリッシュ・アセンダンシーがビッグ・ハウスで培ってきた伝統的社会の一員となることである。そこに住む妻や母親はまさしく、この伝統を守り受け継ぐ者たちである。精神的拠り所を求めながらも、漠然ではあるものの変化を求めている Lois は、「変わらぬ生活様式」や「秩序」といった「不変」を軸とするビッグ・ハウス文化、その象徴ともいえる Danielstown の住人としては異質な存在である。そして Lois の良き理解者であり彼女と同じく Danielstown に滞在している Laurence もまた、この邸宅の住人としては異質な存在である。

Lois にとって身近な理解者であり、年齢的にも彼女に一番近い Laurence がこの邸宅に対して抱く思いには、Lois と同様な矛盾を孕んでおり、またこの邸宅の末路を暗示させるものがある。Laurence もアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーであり、彼は Lois と同様 Danielstown の中では次世代を担う存在と言える。Laurence にとって頻繁に模様される宴会は“unreal party” (56) であり、彼にとってこの邸宅は“a dreadful house” (163) である。しかし金銭的理由からこの邸宅に留まっている。表面的には Danielstown を嫌っているが、彼も Lois と同様な矛盾を抱えている。

“[...] I should like something else to happen, some crude intrusion of the actual. I feel all gassy inside from yawning. I should like to be here when this house burns.”

“Quite impossible; quite unthinkable. Why don't you fish or something?... Nonsense!” he [Mr. Montmorency] added, looking warningly at the house.

“Of course, it will, though. And we shall all be so careful not to notice.” (ibid., 58. 下線筆

者)

Laurence は何かもっと現実的なことが起こってほしいと願いつつも、Danielstown が焼け落ちる時もここにいたいという。そんなことはありえない、ばかげているという Montmorency に対し、Laurence はさらに「自分達は気づかないようにしている」と述べる。これは Danielstown の外では、アイルランド独立運動の激しさが増してゆく中で、Danielstown やその住人たちは、相変わらず日々テニスやパーティーに明け暮れているという現状を指摘したものである。Laurence は Danielstown の置かれている現状を冷静に理解しつつも、この邸宅への愛着をも示しており、彼の矛盾の中に Lois との類似性をみてとることができる。

“burn” について

Laurence の何気ない発言の中で使用されている “burn” という表現は、実は Lois も使用しており、Danielstown の炎上を匂わせている。Danielstown を訪れていた Marda が出発する際、Lois は寂しさを覚える一方で、Marda の滞在していた部屋のカーペットが邸宅と共に燃えてしまえばいいと願う。

Already the room seemed full of the dusk of oblivion. And she hoped that instead of bleaching to dust in summers of empty sunshine, the carpet would burn with the house in a scarlet night to make one flaming call upon Marda's memory. Lois again realized that no one had come for her, after all. She thought: “I must marry Gerald.” (ibid., 141. 下線筆者)

この “burn” という表現は Marda との日々を失いたくない Lois の思いの強さをも表しているが、Laurence の発言と同様この邸宅と結びつけられて用いられていることから、伏線として邸宅の炎

上を読み手に彷彿させる形となっている。

18 世紀半以降ビッグ・ハウスはその性質上、アイルランド人たちからは支配者階級の館ないしは支配そのものを象徴するものとして受け止められていた。そして 20 世紀に入りアイルランドで独立運動が激しさを増すと、その攻撃対象は英国人のみならず、アングロ・アイリッシュ・アセンダンシーにも及ぶようになった。ビッグ・ハウス炎上という展開は、現実問題としてアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーたちを取り巻いていたのである。さらに Bowen 自身 1921 年に父親からボウエンズ・コートが焼き討ちにあうかもしれないという趣旨の連絡を受けていた。これはボウエンズ・コート近隣のビッグ・ハウスが襲撃を受けたためであり、Bowen はこの経験からビッグ・ハウスを取り巻く現状を知ると共にビッグ・ハウス炎上という着想を得ている。実際にはボウエンズ・コートは焼き討ちにあうことはなく、Bowen が 1930 年に相続し、維持費の問題から 1959 年に手放すまで存在し続けた。しかし売却から 3 年後、ボウエンズ・コートは炎上ではなく取り壊しという形で長い歴史に幕を下ろした。ビッグ・ハウス炎上という着想は、この *The Last September* の中で Danielstown の焼き討ちという形で描き出されている。では、この展開は歴史的事実の他に、作品の中でどのような役割をはたしているのだろうか。

Danielstown の炎上が意味すること

The Last September は作品最後の三章において、大きな展開を見せる。英国軍人であり、さしたる財産を持たない Gerald は Naylor 夫人から Lois と別れるよう告げられる。Lois を愛しているものの、Danielstown に象徴されるアングロ・アイリッシュ・アセンダンシー社会の一員に慣れない Gerald は Lois に別れを告げる。その後、彼は敵の待ち伏せにあい射殺される。Gerald との別れと死を経験した Lois はフランスに行くことを決意し、Laurence も同じくフランスへと旅立つ。Danielstown を担う世代の二人が去った後、邸宅

はIRAによって焼き討ちにあう。炎上する Danielstown を茫然と Naylor 夫妻が見つめる姿で、作品は終わる。この終わり方を解釈する上で、Bowen 自身のビッグ・ハウスに対する考えが一つの示唆を与えてくれる。

The big house has much to learn—and it must learn if it is to survive at all. But it also has much to give. The young people who are taking on these big houses, who accept the burden and continue the struggle are not content, now, to live for themselves only; they will not be content, either, to live ‘just for the house.’ The young cannot afford to be stupid—they expect the houses they keep alive to inherit, in a changed world and under changed conditions, the good life for which they were first built. The good in the new can add to, not destroy, the good in the old. From inside many big houses (and these will be the survivors) barriers are being impatiently attacked. But it must be seen that a barrier has two sides. (*Collected Impressions*, 200. 下線筆者)

繰り返し使用されているこの“changed”という表現は、ビッグ・ハウスが置かれていた状況を表している。Laurence の言った“not to notice”という「気づかない」ということや「不変」であるとういことは、まさしく旧来のビッグ・ハウス文化の在り様である。*The Last September* では Lois と Gerald の結婚、アングロ・アイリッシュ・アセンダンシーとイングランド人との結婚という変化を Naylor 夫人は拒絶した。これは言い換えるならば「変化」を受け入れなかった事になり、

Danielstown は変化から取り残され、炎上という形で終わりを告げたともいえるのではないだろうか。しかし、*The Last September* の展開には Bowen の悲観的考えだけではなく、かすかな希望をも含んでいる。なぜなら、次の世代を担う若者の象徴である Lois と Laurence は新たな世界に旅立っており、「繭」からの誕生、すなわち「変化」を果たしているからである。Lois や Laurence の中には Danielstown への想いがあり、物理的に邸宅が焼失し邸宅そのものの継承が途切れるとしても、その精神性は彼らの中に残っており、精神性の継承は続いていく。*The Last September* のなかで Danielstown は旧来のビッグ・ハウス文化やアングロ・アイリッシュ・アセンダンシーを象徴しながら、ヒロイン Lois の成長という変化と共に邸宅炎上という形で描かれることによって、新たなビッグ・ハウス文化のあり方を提唱しているのではないだろうか。

参考文献

- Bloom, Harold. *Elizabeth Bowen*. New York: Chelsea House, 1987.
- Bowen, Elizabeth. *Bowen's Court & Seven Writers*. London: Vintage, 1999.
- . *Collected Impressions*. London: Longmans, 1950.
- . *The Last September*. 1929. New York: Anchor Books, 2000.
- Ellmann, Maud. *Elizabeth Bowen: The Shadow Across the Page*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2003.
- 風呂本武敏『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』世界思想社、2009年。
- 松井かや「Elizabeth Bowen の描く家と女性—“The New House” と *The Last September* を読む」長野看護大学紀要 12: 9-19, 2010年。
- 山根木加名子『エリザベス・ボウエン研究』欧史社、1991年。